

平和の礎

海外引揚者が語り継ぐ労苦



平和の礎

海外引揚者が語り継ぐ労苦

平和の礎

海外引揚者が語り継ぐ労苦

平成三年三月二十九日 印刷

平成三年三月二十九日 発行

編集 東京都文京区大塚五丁目三ノ十三
発行 平和祈念事業特別基金
印刷 新日本法規出版株式会社

海外引揚者が語り継ぐ労苦

目次

まえがき

忘れ得ぬ私の手記

栄光と苦勞満州奉天引き揚げ者

敗戦後の記

生地獄だったシベリアでの労働

第二のふる里満州の記

我が家の敗戦体験

新京から北上

私の満州終戦前後の事情

回顧・随想録

引揚記

旧満州ハルピンの男狩り

栄光の座から奈落の底へ

命令の陸路帰国―虐待に命がけ

同じ船団中の一帆船に乗る

孤児と墓標式百五十柱

撫順の思い出

満州より引き揚げて

藤井良二

頁

香田照夫 1

山口是知 6

松岡末次 9

内海 深 11

小松さと 14

池田幸次郎 22

廣井由松 27

五十嵐直一 30

露久保甲三 33

池宮城幸興 38

吉国成美 41

中村八郎 55

石川 武 57

岩崎重夫 64

江頭ふみ子 69

辻 フサ子 74

日高萬壽子 75

旧満州引揚げ私の意志でない

救われた我が命

満州での終戦抑留に耐えて

思い出の記

北支那での思い出

引揚者の一人として

ハルピン駅の迷子を無事親元へ

私の歩んだ軍隊生活と戦後

私の戦前・戦中・戦後

シベリアから復員までの労苦

終戦後の出来事

満州引揚者の体験

私の引き揚げ体験、帰国まで

勤勞奉仕隊から開拓花嫁に

満州開拓青少年義勇軍に参加して

私の経路

旧満州国東三河郷開拓団回顧末記

北満の痛恨

積み残された三百五十人の遭難

西島好夫 77

中山菊松 86

大嶺真三 96

樋口 なつ 99

前田美恵子 102

羽柴芳太郎 104

結城久子 106

植田三郎 108

石川 佐中 110

板倉博明 112

曾根碩二 115

佐々木賢二 118

小原 昭 122

坂野マサイ 127

高橋 章 130

浦郷布治衛 132

瀧川 辰雄 136

門田幸次郎 138

田中 弘 144

奉天の終戦	多田すみゑ	149
ひとつの思い出	平井正元	153
従軍看護婦としての体験記	藤井芳子	155
満鉄社員時代引揚げの思い出	石井光兼	158
満州国総務長官秘書処員で 終戦帰国して	山本茂三	162
引揚者の体験記	高橋三男	165
嗚呼満州	藤岡重司	169
満州引揚者の体験より	田島梧郎	172
特別な立場に置かれた 引き揚げ者の体験	江原直巳	176
大陸への憧れと戦後までの 生活記録概要	千葉慶吉	180
私の引揚げ日記	塩谷隆徳	184
終戦後四か月間の京城の思い出	石神正雄	191
裸の人生行路	佐藤寅蔵	193
父と娘との絆	山崎虎蔵	199
引揚者体験の一断面	下條美武	202
悲惨な引揚者	金子一	204

台湾から引き揚げた母子家庭	中村信子	209
苦難の日に学ぶ	土屋セツ子	214
蓬萊の島を後にして	藤浦ムツ	217
私の戦争体験記	牧野清	219
私の俘虜生活	出町成夫	226
私の体験Ⅱ樺太・シベリアⅡ	水野力	232
真岡の艦砲射撃に伴う 八月二十日前後の思い出	佐藤晴夫	234
敗戦に思う	乃生哲己	240
敗戦の思い出	中河義雄	244
戦場にさ迷う日々	長井精子	247
苦しい体験をとおしての願い	山下幸美子	250
戦中・戦後を追想する	川上恭広	253
仏領印度支那崩壊と 越南国誕生の溪谷に彷徨す	土屋米吉	256
あとがき		

忘れ得ぬ私の手記

福岡県 香田 照夫

昭和十二年七月ごろ、市内で〇〇方面の軍属募集があり、満州であることは分かっていたので志願し三回目で採用となった。家族同伴も許可があり小倉造兵廠へ呼び出しを受け渡航することが決定した。

同年の九月に下関港を出発し、目的地は満州国奉天省遼陽出張所付警備隊員として赴任し、遼陽出張所長の今大尉の指揮のもとに勤務することとなった。なお、正式には南満陸軍造兵廠としての名義であったが、建設途上のため工廠も陸軍官舎もなく、一般官舎は元の満人家屋を改造したもので、生まれて初めての満人家屋に起居することに少し心に抵抗がありましたが、辛抱しなくてはと毎日警備教育が日常の仕事でした。日本語の分かるボーイが良くやってくれました。

翌々年にやっと現地に工場地帯の工事も進み、同時に

東京陵と言う工場地帯より一里位離れた所に軍人軍属の官舎も工事が進み、私たち家族も新築の官舎に住むことになり正式に桜ヶ丘と命名され春日町の一番一号室が私の自家になりました。部隊名も南満陸軍造兵廠遼陽出張所中橋隊となりました。中橋桂次郎の指揮下になり副官は政井中尉この人は兵役中尉でした。

直属はこれから政井中尉の指揮下に警備隊に入り、勤務の途中で副官に呼び出されて極秘の命令を受け、警備隊の多くの中から五人程優秀な警備員を採用し、警備隊とは別行動の特務を編成し治安確保に全力を尽くせとの命令があり、先輩の田村警備取締、私もそうでしたが二人で相談し外三人計五人をもって表面は特別小隊として発足治安に当たったわけです。

その間、日本軍属及び中国人の中で、あらゆる犯罪者を逮捕し名声が部内に広がりその功績が認められ憲兵隊の知るところとなり、副官政井中尉の推薦で我が隊に憲兵伍長二人が派遣され我等と合流、終戦数か月前に二人の憲兵は南方へ派遣され出兵したまま消息がなく、終戦時まで五人の特別警備隊と正式警備隊との情報交換をし

ながら終戦を迎えました。

終戦後はしばらく負けたことを知らず終戦を知ったのが八月十八日でした。三日遅れで知り、後は聞いたことですが日本が負けたことを知った関東軍の指令部は八月十五日前、飛行機で家族同伴で内地へ逃げたと情報や噂がもつぱらでした。終戦までの話はここまでで終わり終戦から内地引揚までを書きたいと思っています。なかなか細かいことまで手記に馴れませんので略して簡単に申し上げてみたいと思います。

まず終戦後ソ連兵進駐という事態になり、ソ連軍遼陽地区司令官の命により軍人軍属は全員シベリア行きと部隊本部に連絡がありました。その前に当時中橋隊から異動があり林陸軍少尉が終戦当時の部隊長でした。その林閣下はソ連の命令でスターリンの革命記念日という招待を受けそのまま他所へ連行されていたのです。シベリア行きをソ連が慣行させるならと浜本大尉が一人でソ連駐代司令と話し合い、ソ連が交渉に応じない時は我が部隊は全員玉碎するのだと言残し、ソ連司令のもとへ浜本大尉は出掛けました。

ソ連指令官に会い、部隊事情や玉碎の話をしたところ、ソ連司令官は了解し貴隊は物資があるため番外でシベリア行きに応ずる必要なし、そのかわりにソ連警備隊を派遣することを司令官と浜本大尉と交渉が成立、浜本大尉としては我が隊内は三時過ぎると玉碎の打ち合わせが出来ているので、大尉は玉碎させてはならぬと心配のあまり、遼陽市内から軍刀をさげたまま帰隊を急いでいた。

部隊の方では浜本大尉の帰隊を今か今かと待ち、浜本大尉の返事を聞かなければ講堂の地下に準備した黄色薬一屯が爆発する。建物兵舎その他、施設はおろか何にも残らない事態になり生き延びたい軍人軍属の家族は半道以上に離れないと危険と言う。男がシベリアに強制収容されれば女子供だけでは孤立し、男が居ないとソ連兵や中国人、満人にどんな目に会うかも知れない、いっそのこと三時まで大尉が帰隊しない時はいさぎよく玉碎しようとして玉碎講堂に正服姿の軍人軍属の家族が集まっていた。

三時になったら点火役特務の田村氏が任命されて待ち、三時五分前に連絡員の一人浜本氏が帰隊したと連絡があ

り、浜本氏の姿が遂に見えた、点火をするなの声、田村氏も確認をした。点火を中止し講堂内の皆に知らせ、時間通りに浜本氏が帰隊したので少しは安心した。やがて大半の人々は講堂の外へ出た。浜本氏の報告によると大隊の軍人軍属一同今までのまま生活してもよい、なお女子供にソ連兵は手を出すことを禁じたとの司令官の言葉を報告したので一同安心して解散し官舎に戻っていた。なかには薬を各自が持っているので自決した家族もいた。多くは自宅へ戻ったようであった。

私も妻や女中、子供を連れて官舎に戻り生活していたが、二十年の十二月中旬過ぎに、突然、私の官舎を共産軍が包囲し三、四人が土足のまま屋内に侵入し、お前は香田かと聞く、そうだと言うと兵器を持っていたはずだ出せと言うので、武装解除の折に提出しソ連軍に渡したと言うが聞かず、家宅捜査すると家の中を調べ始め一室一杯に衣類家財道具を放置したが、拳銃を持っていたのはどうしたと聞く、これも解除と同時に出したと言ったが嘘を言うなど捜査を続けた。いくら捜しても出ないので、よし、香田お前を調べる、連行するといいい、手錠を

かけ表の馬車ターチョに乗せ護送縄をかけ、両方に一人左右に護衛し拳銃をつきつけ出発し、遼陽市内の城内を通過元日本人の警察署の留置場に入れられた。

その後毎夜九時ごろから夜中に調べが始まり、調査の内容は今までにどんな犯罪者を何人位検挙したか、何人位送検したか、その他部隊では誰が、なんという人は個人財産があるか、お前はどの位の財産があるかなどを調べ、知らぬと言うと裸にして四人掛りで蹴る、なぐるの拷問、鼻から出血、体は打撲傷で痛い、痛いと言っておれない状態であった。これが一週間位続いて身うごきが出来なくなった。これで私も死ぬかと思った。

ある朝十時位だったと思うが保安隊老人の声が一段と大声で聞えて来て、良く聞くと団長を出せと大声。係の兵士が玄関に出たところ団長に交渉があるという。団長が出たようだと言った話声にかわった。何の話をしたか私には不明です。ところが留置場番兵の一人が、香田お前は藍と言う人を知っているか、知っておるとその藍の母が今団長と話しているという。それから三十分位して藍の母が留置場に来て香田さん、香田さん、と呼

ぶので留置場の一番奥に伏していた私が顔を起して、たしかに藍ワイトクの母親と確認した。先夜の取調べで全身動けないことを知って、兵士二人入ってきて私を抱えるようにして留置場の入口まで連れて来て母親に会った。

母親は団長に相談して明十時に釈放ときました。明日再度身の引受けに来る、今息子は四平街の八路軍の自動車隊の団長になっているとのこと。私の身柄を逮捕した団長は聞くと藍ワイトクが八路軍では先輩であったので、母親の言うことに賛同したことが分り、二、三日内には息子に連絡してあるのでお宅へ来ますと言う話。今何が要るかと尋ねるので、煙草が吸いたいと喫煙のポーズをするとボーイに買いにやらせ、久しぶりでしかも藍のお陰で助かった。今からすぐ官舎の奥さんに、夫が米や牛肉を持って行くから栄養をつけなさい奥様が心配しないようにと毛布を差し入れてくれました。

翌朝十時ころ部隊の将校や軍属と藍の母親とが身元を引受けて手続終了し、団長以下が玄関で見送り釈放された。後で聞いた話では母親は逮捕を命じた団長に金一封十五円と身柄引取りに来た場合、後の十五円を約束した

ので、当時私は三十円で身柄釈放になったものと思う。外国人でもなかには義理人情の厚い人もいることを考え内地に無事帰郷したら二度と人を調べる仕事はしないと心に十分言い聞かせ、引揚後は社会のためボランティアの仕事は今まで続けている。貧乏はしても人のため世のために尽すことを念頭に考えております。

釈放され官舎で静養していると、二日後に我が隊の陸軍病院長の岡野大尉が来てくれて健康診断をして驚き、よくも生きて帰隊が出来た、今晚から一時入院しなさい、これだけの打撲傷や内臓が悪いと危険だということで早速入院。個室に収容して貰い一週間位で健康を取り戻したように見えた。

その時、保安隊が異動した後任の団長が、再調査をするので再度私を拘束するという情報が入ったので、夜陰に乗り病院に置手紙を残し脱院した。目指すは奉天市内。元部隊の建設は大倉組企業と清水組が専属で火薬工場、陸軍官舎の建設に従事し清水組の所長の白水所長は奉天市であったので、一応落付くまでと思い二日がかりで奉天市内の白水氏宅に無事到着し、事の次第を打ち明け、

内密に妻にも住所を知らせて置き、私の行動はすべて夜間、昼間の行動は大危険である仕事があったので危険性が大きく夜間作業でも満人は殆ど知っていた。

それから白水氏宅で十日位を経て妻の方から私の従兄弟の小柳明治氏、現在横浜市に居住の彼が、私は勿論家族にも危険が迫っているので明治氏と話し合って、今晚我が隊を脱出しないと家族を人質にすると団長が命令したそうで、昼間家内に準備させ今晚十一時ころに起こして脱走を実行すると連絡し、行動については奉天の私は知る由もなく、ただただ小柳氏と家族女中まで四人の無事を祈る外はなく翌朝、小柳氏と家内、女中、子供たちが雪の中を歩き隊の脱出を決行。

鉄条網を破り、小高い山を登り、雪の中子供たちにも勇みを付け、お父さんの所へ行くんだと気合いを入れ、寒空の中を張台子という駅までたどり付き、駅の中をのぞくと日本人駅長が一人、ソ連兵が一人居るが、駅長の話では寒いので昨夜ウオッカを飲み過ぎ、ぐっすり寝ているので大丈夫、香田さんは良く知ってお世話になりましたという。家族の危険を話すと快くストローをたいて

濡れた衣服を乾かし、小さい駅で通過してしまうがお互い機関士も日本人同士だから、朝一番貨物列車を停車させ便乗させる、と話してくれた。

午前一時四十分ころ予定の列車がホームに入った。駅長は駆けより機関士と打ち合せ、早速便乗させてもらうことになり家内も安心しました。機関助手の心配は奉天駅は大丈夫でも、こん河という大橋があり、そこはソ連の駐屯地で衛兵が汽車を停止させ調べると言うこと、そこで機関士と助手、明治氏と三人で機関車の石炭を手前に出し、石炭倉庫に家族全員を入れ前の方をカムフラージュして、ソ連兵が乗車したら助手は石炭を少しづつ釜にくべ、約十五分でソ連の検査が終り「ハラッショ」良しと出発。機関士と全員が安心し、家内は心からお礼を残し予定通りに奉天駅構内に入った。

瓦斯会社がB29にやられた地点で幸いにして列車の信号が赤であったので停車し、機関士の指令で家族が下車し全員揃って私のいる白水宅に到着した。朝がやっと白らけたところで、その時白水の長男が小さい小窓から見張りをしていたところ、おじさん、おばさんたちが来たよ！

大声で白水家も私も飛び上り、何人来たねと聞くと六、七人いるよ、おばさんは赤ちゃんをおぶっているよ、私も長男照昭をおぶっての脱出であった。

お陰で皆々の関係者の方々が生命をかけて助けてくれたお陰で本日まで無事生計を保つことが出来ました。妻も本当に引揚までまた引揚て来てからも並大抵でない苦労をし四十四才で他界したが、子供たち全員、私を含めて健康であり。あの時、あのころを思い忘れることはないと思う。

なかなか書き表わすことは難しく不明の点はよろしく理解して下さい。まだまだ私より以上の危険に苦しめた方々も多いと思います。戦争がもたらしたこのような手記を読み、これからは戦争を絶対に無くしましょう。

栄光と苦勞満州奉天引き揚げ者

東京都 山口 是知

私は昭和二十一年八月十五日満州奉天から長崎に引き揚げた者である。

第二次世界大戦は、枢軸国側に不利となり、まずイタリアが連合国に降伏し、ついで昭和二十年五月、ドイツが降伏するにおよび、日本ひとり連合国と戦争をつづけるにいたった。戦局は日に日に悪化していた。沖縄が占領されるにおよび、敗戦は決定的であったが、私はなお最後の神風きたるを信じていた。

しかるに八月九日、ソ連軍参戦におよび、戦局は急速に悪化した。広島、長崎に原爆が投下されたことが日本の降伏にいたらしめた大きな原因ではあるが、われわれ在満州にとつては、ソ連の中立条約を破棄した南侵こそ決定的な打撃であった。

北満開拓団員が銃をもち、妻子の手を引いてぞくぞくと奉天に南下してきて、事の一大事を悟った。在奉天の日本人老幼婦女にも避難命令が出たが、わが家は、いわ

ば敵中に避難するの愚を考えて、家族一同とどまることにした。

十二、三日頃に、ソ連軍戦車に対する壕を掘るようにと住民に軍からの命令があった。みずからの生命を守るために私らは奉天市加藤町に戦車壕を掘った。十四日におよび、戦局にわかに好転、ソ連と話がついたというので中止となった。

しかし真実は、日本軍の全面降伏であった、十五日天皇の詔勅をラジオで聞くにおよび、われわれの生命財産を守る者は、軍も警察もなくなり、各自が防衛しなければならなくなった。関東軍報道班長長谷川大佐は、「日本人の生命財産は、関東軍が守る」と放送したが、その軍はわれわれからみれば所在不明であった。夜間、われわれが自衛しているところに憲兵が低姿勢で状況を聞きにきた。中国側の監獄が破壊され、囚人が脱走したという。

八月十九日、ソ連軍入城により、戦車壕は、埋め戻せとのソ連側の命令により、われわれは、作業にかかった。地ひびきを立て、街中を侵入する戦車は、日本軍のもの

と比較にならぬぐらい大きかった。

作業が夕方にかかると、八路系の者と思われる中国人が、自動車にのり、ピストルを空に向かって発砲しつつ、われわれを威かくした。積年のうらみをはらすは、今こそといわんばかりであった。われわれは危険を感じ、作業を中止して帰宅した。わが店舗（事務所）は、加藤町十五番地の街角にあり、ただちに防空扉をウインドガラスに立て危難を防護した。帰宅するや暴徒は、街に襲来した。防扉のないビルは皆ガラスをこわされ、略奪されるにいたった。その夜、私達親子は、暴徒のくることを覚悟し、軍刀で防御することにした。また、灰を状袋につめて、暴徒に目つぶしとすることにした。すでに昼間、日本人は暴徒に暴行を加えられる者があり、最悪を覚悟した。父は、万一の時は、私が脱出して日本に帰国するようにとの厳命を下し、親子悲壮な思いであった、一夜まんじりともしなかったが、さいわいにして無事であった。

しかし、日がのぼると共に暴徒は北側の電車通りに充満し、いっきよに突入して暴奪を開始する態勢を作った。

その数は万を超えるともえた。われわれは危険を感じ、急遽自衛団を組織し、これに対抗した。在郷軍人の中尉一人少尉一人が指揮にあたった。わずかに数百人の自衛団はよく、暴徒に対抗した。もとより数においておよぶべきもないが、日本人が死にものぐるいに抵抗すれば、おそろしいと思ったのか、終日対立するのみであった。一部は電車通りから、抵抗の弱いほうへと迂回して、われわれのほうには侵入してこなかった。私の母をはじめ、女性も、炊き出しをし、握り飯を作って、腹ごしらえをした。さいわい昼間はぶじ終わった。夜は私の家(店舗)を屯所として、皆徹夜をした。夜中に時折銃声したが、ソ連兵が監視を始めたので、われわれのビジネス街(卸商、会社等)は鎮静化した。又ソ連将校が近くに駐在したので、職業女性を派して慰安にあたらしめ、慰撫させた。不甲斐ないことであった。

しかし、翌日も暴徒は、南部の住宅所を迂回略奪をしたのが、逆にわれわれの街を通って中国人街に走り去った。ある者は馬車で、あるいは徒歩で。私の店舗の裏に警察官舎があったが、警官は家族と共に逃走した。復しゅ

うをおそれたのである。その頃営団の鈴木造船所の幹部以下家族数十人が、私の家に頼ってきた。又本土防衛要員なる将校下士官のうち、数十人が親戚の大尉の懇請の下に保護を求めてきたので、これを受け入れて、保護した。保護さるべきわれわれが、保護すべき軍人を保護したのである。一行四百余人、捕虜となれば、早く帰国できるといってわざわざ申し出た将兵があった。最後まで私の言うことをきいていた将校は、後、いっしょに無事帰国した。

十月頃在郷軍人が、父をたずねてきた。中国人の建軍と称する者が、満州再建の為軍隊を作りたいので、協力して貰いたいと言ってきた、父は通訳を連れて城内(中国人街)におもむき、話し合った。しかし、老人の故を以て謝絶してぶじ帰宅した。当時在住者の有力者はいはソ連兵に射殺された者、家を占拠され、追い出された者、暴行略奪された悲惨な例が数々あった時だけにまったく安心した。又ソ連兵はわが家を占拠したが友好的であった。反面、中国共産軍と中央軍の満州占領で日によって、ある時はソ連、共産軍、又別の日に中央軍と国旗が

変わることもあり、敗戦国民は、まったくみじめであった。冬になると凍死者も出た。中央軍の将校と親しくなってもわれわれは亡国民といわれ、切齒扼腕するのみであった。生活は売り食いで翌年胡蘆島にたどりつき、引き揚げの国旗をみて、始めて救われたと思った。

国旗を大事にせねばならぬ。いざとなれば、軍も領事館もあてにならぬ亡国民となることを知っておくべきだ。

敗戦後の記

岐阜県 松岡 末次

「マーチオカおるか。」今夜もまた呼び出される。断ることのできぬ否応なしの呼び出しの声。零下十数度の冷気が外に出た途端に身を包む。保安隊員の出迎えだ。旧陸軍の三八銃の安全装置を外す音が痛く響く。

保安隊詰所の中はストーブがゴーと音をたてて燃え、息が詰まるくらいの熱気である。「工員の某が病気で欠

勤した時、葉と言って毒薬を与えただろう。」「そんな覚えは絶対無い。」「嘘を言うな。」「嘘と言うなら証人を連れてきて欲しい。」「いつまで嘘を言う気だ。」「よく調べて欲しい。」「そんな問答の後には、」「よく調べるから今夜は帰ってよらしい。」「数日このような詰問が続く、最後はきまって、」「帰ってもソ連の警備兵に絶対言ってはダメだぞ。」「と念を押されて詰所を出る。」「今夜も無事に済んだ。」「とホッとしながら……。

松川氏の尋問途中での発疹チフスによる死亡。松尾氏と守衛長の安田氏が拉致されて以後戻らず、消息不明になった同僚だった各氏のことを思いながら、わが身の安全だったのに感謝し、凍てついた凍雪の凸凹に足を取られつつ、凍傷になった指を屈伸させながら帰る。いつも寝泊まりに來ている義勇隊の子供たちが大根をおろして凍傷になった指を癒してくれる。

「家内が産気づいて苦しんでいる。医者を頼んで欲しい。」と夜中に工員が頼みに来たが、夜中でもあり妊婦を運ぶ方法もなく、会社の守衛に「責任を取るから」と強引に会社のバスを出し、市街の産院を回り断られ続け

て、ようやく満人医師の産院で、胎児が横位のため切断して処置してもらい母体を助けたこと。残業々々で帰るのが遅いため、帰りを待つ祖母との二人世帯へ肉や煙草を届けてやったこと。会社を休み闇物資を錦県へ運び經濟警察に捕らえられ、弓長嶺の強制労働収容所へ送られた工員たちを、所長の軍將校と強談判で釈放させたことなどを思い浮かべ、まるでその逆の理由での取り調べに腹の立つ日々だった敗戦の年の冬。

北満では軍の仕事と開拓団の建設工事に従事していたが、大本営発表の「勝った勝った」に疑問を持ち、昭和十八年暮に奉天市皇姑区の満州車両株式会社に移り、労務担当員として鍛冶、鑄鉄、鑄工の職場に配置される。翌年八月初旬、ソ連軍の侵攻の情報が流れ九日に北陵が爆撃され黒煙が望見される。十五日の重大放送はソ連への宣戦布告と思ったのが敗戦の詔勅。その間の社宅内外の動揺は十五日からはさらに大きく、避難した家族列車は引き返し、北京街道は戦車の壕掘りが続き、資材を会社から運び社宅の周辺を囲み、各所に見張り塔を建てて交替で見張り員を配置し警備態勢に入る。会社に来てい

た使役の囚人五十余人はいち早く脱走し、会社には暴民が襲い略奪が始まり、婦女子は髪を切り男装し、毎日が緊張の連続である。ソ連兵の社宅内の徘徊はしばしばで、そのたびに天井裏に若い女性を隠し、立ち去らせるために時計や万年筆の提供頻繁。

六月下旬、哈爾浜訓練所から勤労挺身隊として百余人が来社、純粹に挺身の意に燃え労働に励むが、敗戦のショックは少年たちには余りにも強烈で、街へ出て目的もなく行動する者、ソ連の使役として旧陸軍の糧秣庫へ行く者、挺身隊の幹部の心労は大変なものと推察される。武装解除され脱走の兵隊や北方から避難してきた人たちを連れてきて、会社内に居住させたりするのも夜中の仕事の一つになる。会社が正式にソ連軍に接収されてようやく身の安全と食がノルマと引き換えに保証され、動揺も安らぐ。

東側の大きな平坦地を挟んで満鉄の社宅があり、高く黒煙が上がった時暴民に襲撃されていると情報が入り、救援に向かった人たちの中で巡回中の八路军から銃撃を受け、平坦地は大混乱となり、社員から死傷者が出た事

件には皆緊張し、白系露人マキシモフの懸命の仲介で収まる異変もあった。

ソ連のノルマは厳しく、指令の機関車組み立ての目標達成のための徹夜作業は頻繁になされた。また、ソ連へ撤収の鉄道のレール運搬では、そのために腰を痛める者が続出のありさまだった。

そのうちに保安隊の呼び出しもなくなり、年も明けて草木が春の息吹を感じ芽を出すころになると、引き揚げの情報が居留民団の方から伝わり始める。労務担当員という一番睨まれる職業柄、会社の引き揚げ団体編入の最初に入られ、仲田周一氏が団長となる。北陵の収容所で数日を過ごし、荷物検査を終えて無蓋車に乗車するころは、「故国の土を踏むことができた」、の故国一途の気持ちは、「日本へ帰れる。」のほのかな明るい気持ちになる。途中数回の停車を経て壺芦島収容所に着く。国府軍壺芦島弁事処長から使役六十人を出せとの指令が届くが、届け出る者は少なく、自薦して義勇隊の少年たちを中心に第四十一力行隊を編成する。会社からの引き揚げ大隊を収容所から見送る。残留部隊として六月二十六・

七・八日の三日間、国府軍の弾薬運搬の使役に従事する。二十九日、夢にまで見た引き揚げ船の船尾に翻る日章旗を仰ぎ、思いは遥か日本本土の上空に飛ぶ。異国に散った同胞よ、安らかに眠れ。

生地獄だったシベリアでの労働

長野県 内海 深

私は、役場その他の人々より盛んに満州行きを勧められ、昭和十七年四月に渡満しました。

就職した所は満州国際運輸株式会社という大会社でした。大連に上陸して本社より奉天支社行きを命ぜられた。行った所は奉天支社経理課。早速に上司から勤務についてこと細かに指導を受け始めたが、大変に忙しい仕事で、これでは動まらないかと不安でした。しかし、日がたつにつれて仕事の順序を覚えて大分案になりました。

時たま得意先へ出張があり、地理に慣れないために大分苦勞しました。経理課は総員八十人くらいで、長野県人